

<新嘗祭、神嘗祭、古伝新嘗祭>

現在、11月23日は「勤労感謝の日」とされているが、本来は「新嘗祭（にいなめさい）」と言った。これは、GHQに依る日本人の精神を骨抜きにする政策の一環であり、今では単なる“勤労を感謝するための日”に成り下がっていて、多くの方は本質を忘れてしまっている。では、本来の新嘗祭とは何なのだろうか？それは宮中に於ける最も重要な神事で、天皇陛下が御親（おんみずか）ら成される天皇親祭の神事であり、五穀豊穡を感謝する神事である。また、それに先立ち、伊勢の神宮で行われる、五穀豊穡を神に感謝する神事が神嘗祭（かんなめさい）である。その詳しい内容を、主に「神社のいろは 用語集 祭祀編（扶桑社）」から紹介しよう。併せて、出雲大社で行われる古伝新嘗祭（こでんしんじょうさい）についても紹介しよう。なお、このテキストは「神道用語集 祭祀編」（宗教編と祭祀編がある）が基本となっており、神職ならば当然知っておくべき祭祀知識がまとめられたものである。

1：新嘗祭

いわゆる収穫感謝祭で、かつては旧暦11月の下の卯の日、三の卯の日があれば中の卯の日に行われていたが、明治の改暦により、明治6年の祭典日が新暦で11月23日に相当していたことから、以後、11月23日とされた。この日は現在でも祭日だが、“祭日”とは、宮中での神事（祭典）があるからこそ、休日とされたのである。

(1) 祭典場所

祭典が斎行される場所は宮中の神嘉殿（しんかでん）で、新嘗祭の時だけ使用され、常には神は祀られていない。従って、祭典の際には一切の舗設が必要となる。神嘉殿は殿内中央に母屋（本殿）、東に東隔殿（かくでん）、西に西隔殿の構造で、北と西は廊下、南と東は簀子（すのこ）縁で取り囲まれ、南正面に階段がある。その南庭を神嘉殿前庭と言い、東に膳舎（かしわしゃ、新嘗祭用の神饌を準備して並べておく所）があり、廊下で東の簀子に通じている。膳舎の南には参列者用の帳舎（あくしゃ、座って見守る場所）がある。

母屋の舗設として重要なのは、神座、寢座、御座（陛下が座られる場所）で、神座は黄端の短畳（たんじょう）、御座は白端の半畳で、神座と御座は相対して西南の神宮の方向に設けられる。寢座は神座・御座の東、母屋のほぼ中央に南北に敷かれる。薄帖（薄い畳）を何枚も重ね敷き、南に坂枕（さかまくら、薦（こも）で作られた頭を乗せる部分が斜めになっている枕）を置き、羽二重袷（はぶたえあわせ）仕立ての御衾（おふすま）が掛けられる。その端には女儀用の櫛、檜扇（ひおうぎ）、沓（くつ）などが置かれ、古くはこれを「第一の神座」と称した。

このように、向きとしては神宮の方向を基本とし、女儀用というのだから、ここで降臨する神は、皇祖神で女神の天照大神をおいて他に無い。そして、一

宮中三殿全景



さて、母屋の殿内には麻のお壁代（かべしろ、壁の代わりの物）、お帳が垂られ、四隅に白木の置燈楼が置かれる。西隔殿には御座と皇太子の座が設けられ、それぞれ剣璽案、壺切剣案が置かれる。そして、東隔殿には掌典長（しょうてんちょう、陛下に変わって宮中祭祀を斎行する人）と采女（うねめ、内掌典、女性の掌典）の座が、西隔殿の南には侍従長、東宮大夫、侍従の座などが設けられ、膳舎とその廊下には藁薦が敷き詰められる。また、前庭各所には庭燎舎（にわび）が建ち、西側に楽師の楽舎が設けられる。当然、これだけのものを準備するにはそれなりの日数が必要となる。

神饌は古代神饌で、上代に於ける最高の供御（くご）だった。米の蒸し御飯、米の御粥、粟の御飯、粟の御粥と、新米から醸した白酒（しろき、どぶろく）、黒酒（くろき、灰を入れた酒）がある。他に鮮魚は鯛、烏賊、鮑、鮭を甘塩にして三枚に卸し、背の部分を小さい短冊形に切り、一品ずつ四筥（はこ、葛を編んだもの）に納める。干物は干鯛、カツオ、蒸鮑、干鰯で、同様に筥に盛る。菓物は干柿、かち栗、生栗干、棗（なつめ）で、それぞれを入れて筥に盛る。他には鮑の煮付け、海藻の煮付け、鮑の羹（あつもの）、海松（みる）の羹がある。調理用の火は、鑽火（きりび）の忌火を用いる。“忌”とは、この上なく清浄、という意味である。

2

は管型で盛り付け用、枚手は丸い皿型で取り分け用で、窪手の中の神饌が枚手に取り分けられて神前に供され、これらは食薦（すごも、イグサや新藁）の上に並べて供される。

(3) 御神供と御直会

当日午前から神嘉殿内が準備され、午後、掌典長以下が神座奉安を奉仕する。掌典とは、日頃宮中で奉仕する神職で、女性の神職は内掌典と言う。

夕刻、綾綺殿（りょうきでん、お着替えの間）から御祭服をお召しになられた陛下が、東宮便殿（とうぐうびんでん）から祭服をお召しになった皇太子殿下がお出ましになり、神嘉殿東簀子を経て正面の扉から入御（じゅぎょ）され、西隔殿を経て母屋に進み御座に着かれる。剣璽（草薙神剣の写しと勾玉）を捧持して参入した侍従が案上に奉安し、皇太子の壺切御剣は東宮侍従が案上に奉安する。

この出御の頃には参列者は帳舎に着き、膳舎からの神饌行立も始まっているが、行立は神嘉殿東妻戸口の階下の手前まで進み、一旦停止している。陛下の御姿を仰ぐと、そこから進行し、掌典が階下に着くと、高らかに警蹕をかける。通常の警蹕は「おー」だが、この場合は「おーしー」である。これを合図に、神楽舎で楽師が神楽歌を奏し始め、御儀が終了するまで続ける。

そして、御手水具を捧持した掌典と陪膳（ばいぜん、神饌の給仕者）・後取采女（しんどりうねめ、陛下のお側で御用を勤める女官）が殿内に参入し、御手水（陪膳が奉仕）、御親供（ごしんく）となる。

陛下は御手水の後、神宮の方向の神座の御前に正座され、神饌を御親ら供される。枚手にピンセット型の竹箸を用いられ、古来の定め通りの順で供される。本儀は「夕（よい）」と「暁（あかつき）」の 2 回の儀があり、それぞれ同じ儀だが、夕は午後 6 時から 8 時まで、暁は午後 11 時から午前 1 時に至り（かつては夕が午後 10 時、暁が午前 4 時）、その内の各 1 時間半は神饌の御取り分けである。この間、陛下は正座されたままで、皇太子もまた隔殿の座で正座されたままである。そのため、足のしびれが儀の妨げにならないよう、陛下は日頃テレビを御覧になられる時にも正座して馴らされていると漏れ聞く。

御親供が終わると御拝礼され、御告文（おつげぶみ）の奏上があり、皇太子は座を立たれ、母屋御扉口御幌前の拝座に着かれ、礼拝される。続いて参列者が正面階下で拝礼する。

御告文を奏されると御直会となり、陛下は御米飯、御粟飯、白酒、黒酒を聞き食（きこしめ）される。これは神人共食で、神と共に新穀を召すことにより、新穀に宿る穀霊を体内に取り入れるわけだが、これは太陽の恵みを受けて育ったから太陽神の霊威であり、天照大神の皇孫ニギノミコトとしての天皇霊威の更新に他ならない。故に古来、陛下が新穀を聞き食されるまで、庶民は新穀を口にすることはしなかったのである。

御直会の後は、陪膳采女以下の奉仕で神饌が下げられ、再び殿内の御座にて御手水の後、還御となる。これを内々入御と言い、背後の廊下を通られて、一

旦、綾綺殿に戻られる。そして、再び出御され、暁の儀となり、最後は正面からお出になられ、還御される。

御祭服姿の陛下



<http://image.search.yahoo.co.jp/search?rkf=2&ei=UTF-8&p=%E7%A5%9E%E5%98%97%E7%A5%AD>

新嘗祭の様子



産経新聞

①夕と暁の両儀

これは、神宮神嘗祭の由貴夕大御饌（ゆきのゆうべのおおみけ、午後 10 時）と由貴朝大御饌（ゆきのあしたのおおみけ、午前 2 時）に由来する。神嘗祭の詳細については後述するが、新嘗祭が天皇靈威の更新であることに先立って行われる、天照大神の靈威の更新である。

②陛下が直接手にされるピンセット型の竹箸

古代インカでは、太陽神に使える巫女は毛抜き用ピンセットで陰毛を抜かれ、搔把器で陰部を開いて太陽に向けられた。これは、太陽神の靈威を宿すというものである。この場合の太陽神は男神だが、古代インカでは中南米の最高神ククルカン＝ケツアルコアトル＝ニンギシュジツダであり、また、太陽神ウツでもある。

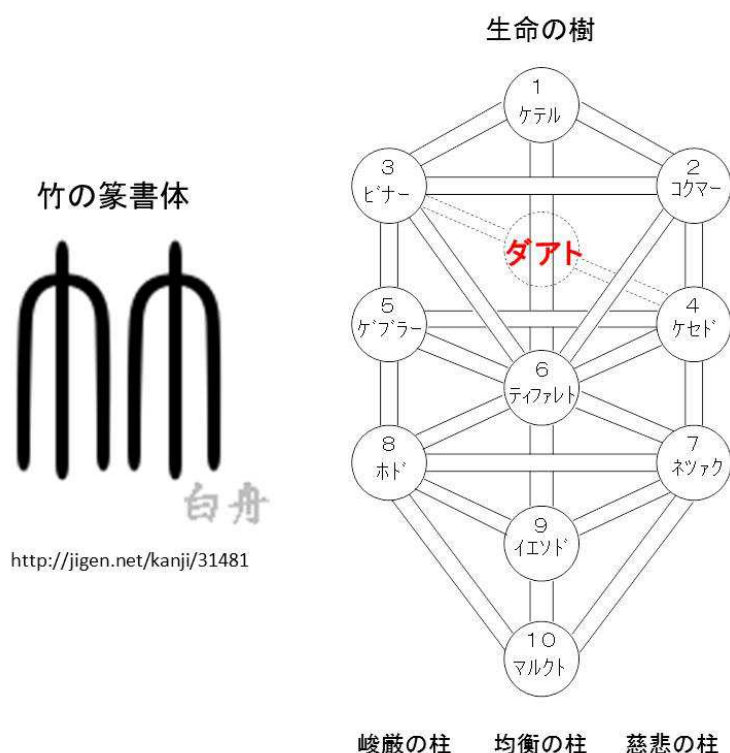
箸の話としては、大物主神が蛇だと判った倭迹迹日百襲姫（ヤマトトトヒモソヒメ）が陰部を箸について死んだ話があり、陰部について死んだ話としては、天照大神あるいは機織り女の稚日女（ワカヒルメ）が機を織っていた時にスサノオが皮を剥いだ馬を投げ入れたのに驚いて梭（ひ）でホト（陰部）をついて死んだ話があるが、ともに陰部について死んだことに着目すると、倭迹迹

日百襲姫と天照大神は同義と見なせる。倭迹迹日百襲姫はこの逸話から箸墓に葬られているとされ、それはまた卑弥呼とも言われ、卑弥呼は豊穰神（豊受大神＝イナナ）と共に太陽神（天照大神、ウツ）を祀っていたことから、倭迹迹日百襲姫と天照大神には深い関係がある。

また古代、箸には使った人の霊力が（唾液によって）宿るとされたから、陰部を箸でついたことは男神との性的交わりを暗示し、ワカヒルメの話の“梭”は“日”に通じるから、これも男神の太陽神との交わりを暗示する。それは、太陽神の子＝日の皇子を宿すことをも意味する。そして、この機を織っていたのは新嘗祭の時、古代の新嘗祭はほぼ冬至の頃だった。冬至は太陽（神）の復活＝神威更新とされ、古代の新嘗祭は太陽神の霊威を新穀と共に頂くことにより天皇霊威を更新するという意味合いがあったから、そういう意味からしても、ワカヒルメの話は太陽神との一体化に依る霊威更新と言える。

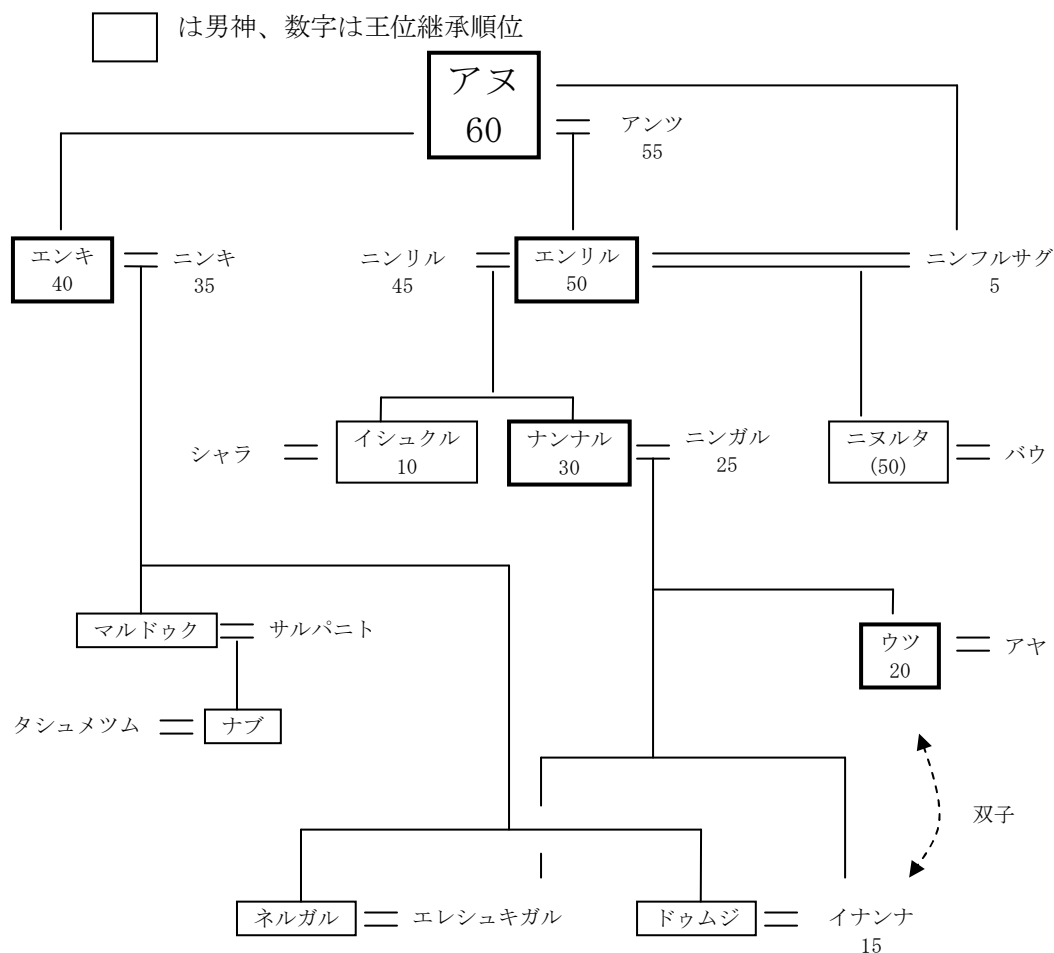
ワカヒルメの話にはスサノオが関係しているが、そのスサノオが出雲に降りた時、斐揖（ひい）川の川上から箸が流れてきたことによって、人が居ることを知った。箸を流したのは、使った人の霊威が宿っているからで、他の人が使わないようにしたためである。そして、“ひい＝ひい＝日”で、これも太陽神を暗示している。

竹は篆書（てんしよ）体は以下のように書くが、これは「生命の樹」の3本柱が「合わせ鏡」になっている象形であり、様々な真相解く鍵“カバラ”の奥義の暗示である。



すなわち、新嘗祭で使われるピンセット状の竹箸は太陽神の靈威を授かることを暗示しており、その箸で供された新穀を神人共食することも併せて、日の皇子の証ということである。

この新嘗祭の対となるのが祈年祭（きねんさい、としごいのまつり）で、現在では2月17日に行われる、その年の五穀豊穰を祈る神事である。



2：神嘗祭

神嘗は“神の饗（あえ）”が変化したものと言われ、“饗え”は食べ物でもてなす意味である。また、饗は新穀を意味する贄（にえ）が転じたとする説もある。いずれにしても、新嘗祭も神嘗祭も、中心となるのは神饌である。

また、神嘗祭は神宮の正月とも言われ、御装束や祭器具を一新するが、20年に一度の大神嘗祭が神宮式年遷宮であり、社殿もすべて一新する。

(1) 現在

大宮司、少宮司以下の神職等と祭主が務める。祭主は神宮に常駐ではなく、祭典の度に神宮に来られる。また、奉幣の儀では、宮中から勅使が参向する。

・10月15日午後5時：興玉神祭（おきたましんさい）

内宮板垣内の西北隅に坐す土地の守り神、興玉神に奉仕神職一同が祭典に仕えることを祈る。

・興玉神祭に続いて御ト（みうら）

神職に限らず、奉仕員全員が祭典に奉仕して良いかどうか、内宮中重（なかのえ）で神慮にはかる。一人一人の奉仕員の職名と名前（姓は無し）が読み上げられると、所役の宮掌（くじょう、権禰宜の次位）が口嘯（うそびき）といって、息を吸い込んでヒュッと口笛を鳴らし、権禰宜が琴板という木の板を笏でコツンと打つ。名前が読み上げられなかったりした場合は、神意に合わないとして、祭典に奉仕することはできない。

・10月15日午後10時：外宮にて由貴夕大御饌

由貴とは、この上なく清浄で丁重、という意味。神饌は瑞垣（みずがき）御門前に供えられる他祭に対して、正殿階下（明治以前は心御柱前）の素木（しらき）の案の上に奉奠される。

神饌は玉貫鮓（たまぬきあわび）、身取鮓（みとりあわび）、生鮓（塩もみ）、鯛（乾、生）、塩（堅塩）、水、御飯三盛（蒸し米）、御餅三盛、伊勢エビ、乾梭魚（ひしゅんぎょ、カマスの干物）、乾伎須（ひきす、鱈の干物）、乾鯉（ひむつ、ムツの開き）、乾香魚（ひこうぎょ、鮎の干物）、乾鮫（ひさめ、鮫の干物、サメのタレ）、乾栄螺（ひさざえ、サザエの干物）、海参（きんこ、ナマコの干物）、乾鯉（かつお節）、鯉（生）、野鳥（鶏の生の片身）、水鳥（鴨の生の片身）、レンコン、乾鮫、昆布、海苔、大根、柿などの約30品目と白酒、黒酒、醴酒（れいしゅ、蒸し米に米麴を加えて一晩ねかせたもの）、清酒である。清酒は献上品だが、それ以外の酒は忌火屋殿で調整される。これに、白木の御箸が一組添えられる。

・10月16日午前2時：外宮にて由貴朝大御饌

由貴夕大御饌と同様。

・10月16日正午：外宮にて奉幣の儀

勅使が参向する。中重（なかのえ）の四丈殿で幣帛の目録を読合し、御扉が開かれ、その大床上に幣帛が供えられる。幣帛とは、神饌以外の神に奉奠されるもので、みてぐら、幣物（へいもつ）とも言われ、布帛、衣服、紙、玉、酒、兵器など様々だが、特に古代、布帛が貴重だったので、それが神への捧げ物の中心だったことから、幣帛と言われる。幣帛は五色繩（いついろのあしぎぬ）、白絹、錦など。かつては内宮と外宮では内容が異なっていた。

・10月16日夕刻：外宮にて御神楽（みかぐら）

内宮は10月16日午後10時に由貴夕大御饌、17日午前2時に由貴朝大御饌、17日正午に奉幣の儀、17日夕刻に御神楽となる。

なお、内宮は大御饌の参進の途中、石段下の御贄調舎（みにえちょうしゃ）で生の鰯を調理する。旧儀では、五十鈴川中州にあった豊受大神の神座に臨んで籠盛りの鰯を清めたが、現在では、御贄調舎にある豊受大神が降りられる御座の前に、3人の権禰宜が忌箸と忌刀で鰯を刻み、塩で和える。

また、内玉垣（うちたまがき）御門には、陛下御親らの根付の御初穂と、全国の農家からカケチカラ（懸税）という初穂が供えられる。

10月17日の内宮神嘗祭に先立つ午前10時、黄櫨染御袍（こうろぜんのごほう）の正装をお召しになった陛下が宮中三殿の神嘉殿南庇に着座され、神宮を御遥拝遊ばされる。次いで賢所（かしこどころ）へ移られ、内陣の御座につかれ、御拝の上、御親ら御告文（祝詞）を奏上される。その際、内々陣に待する内掌典が金の鈴を振る約10分間、天皇陛下は正座のまま平伏遊ばされる。この御鈴を鳴らすのは、天皇陛下の御祈念が天照大神に嘉納されることを示すものと思われ、続く皇后陛下、皇太子殿下・同妃殿下の御拝の際には行われない。

賢所の陛下に依る祭典が終了すると、続いて御十二単の皇后陛下、更に黄丹袍（おうにのほう）の正装をお召しになった皇太子殿下と十二単の皇太子妃が次々と御拝礼され、その後、参列された成年皇族（男性はモーニングコート、女性はロングドレス）がお一方ずつ、三殿それぞれの正面階段下で拝礼され、続いて宮内庁の職員などが順次拝礼され、終了となる。

前述のように、古来、陛下が新穀を聞き食されるまで、庶民は新穀を口にすることはしなかったが、伊勢では今でも神嘗祭が終わるまでは、新穀を口にしないという。

黄櫨染御袍イメージ



http://www.iz2.or.jp/fukushoku/f_disp.php?page_no=0000165

黄丹袍イメージ



<https://www.pinterest.com/pin/383087512024758202/>

神嘗祭



<http://image.search.yahoo.co.jp/search?rkf=2&ei=UTF-8&p=%E7%A5%9E%E5%98%97%E7%A5%AD>

(2) 古儀

①時期－フェニキアとの関係－

かつて神嘗祭は9月、新嘗祭は11月だった。(いずれも旧暦で。)天皇が皇祖の靈威が籠る新穀を聞き召す新嘗祭に先駆け、初穂を大神に奉ることが必要なので、神嘗祭が新嘗祭に先駆ける。

神嘗祭は神宮の正月とも言われるが、フェニキアの古いカナン暦では秋分の頃から1年を数え始めた。カナン暦では種まきを始める時期だが、神宮の神嘗祭は1年の収穫を感謝する神事であり、表裏一体の関係となっている。しばしば、ユダヤ暦との類似性が言われるが、ユダヤ暦はそれよりも古いカナン暦の影響を受けているに過ぎない。また、聖書との相関もよく言われることだが、聖書はフェニキアの地中海東岸最大の商都ビュブロスで編纂されたとされ、それが語源となって“バイブル”である。

ところで、カナンとはフェニキアの一地域だが、フェニキアの様々な習俗は日本の神道に影響を及ぼしている。詳しくは以下の<日本の真相6>を参照されたいが、簡単にまとめると次のようになる。(文末の括弧内が神道。)

<http://iyasaka369.blog.fc2.com/blog-category-3.html>

- ・紫が最高位の色であり、その色素はフェニキアの特産品だった。(神職の最高

位の袴の色は紫。古代貴族の最高の色も紫。)

- ・フェニキアの宗教の世界に於いては、女性も神官長や神官会議の長にもなれた。(古代の巫女王など。)

- ・フェニキア人の1年は、農業の周期と連結した宴と祭りに支配されていた。(神道は五穀豊穰と国家安泰の祈り。)

- ・信仰には、神の存在やその場所を示す種々のシンボルが使われたが、いずれも人間や動物の形をとらない非偶像的なものだった。(神道には偶像が無い。)

- ・男性神官はつばの無いぴったりした帽子を被り、足下まである長い亜麻布の神官服を纏っていた。前の方にはプリーツがたたまれ、袖はゆったりとして、左の肩には神官の印である薄い布を折りたたんだストールが掛かっていた。(神職の服装。)

- ・マルツェ (ポエニ語で“再会の場”の意) と呼ばれる宗教的な親睦会があった。これは、神格化された祖先 (レパイム) を讃える儀式的な食事のことである。その祝宴では、供物や生贄が捧げられ、大酒を飲んだ。(直会：なおらい)

- ・ベテュル (セム語で“神の家”) と呼ばれる高さ 1.5 メートルほどの一本石柱は神の存在と座のシンボルで、祭壇か供物台の前など、神殿の中心に据えられた。(心御柱)

- ・神殿の形態には2つあって、1つは露天の聖域と、もう1つは屋根や壁のある建物の神殿である。(古代の祭りごとの場は露天で、現在は神殿。)

- ・水に関する清めの儀式は、フェニキア人の治癒力信仰に於いて、重要な役割を果たしていた。(水に依る禊。)

- ・フェニキア人は死後の世界を信じており、死者をレパイムと呼んでいたが、これは神である祖先、あるいは神となった死者、を意味し、その語源は“癒す、回復する” という意味である。(死者は神となって家や国を護る。)

このように、フェニキアとの類似性が見られるが、その“フェニキア (人)”とは次のような意味である。

“フェニキア人とは、アシュタルテに生贄として捧げられた聖王のことである。聖王の霊魂は鳥と見なされ、霊魂＝鳥が火葬の炎から再生して天界へ飛翔する。”

アシュタルテはフェニキアの最高神で豊穰の女神であり、シュメールの女神

イナンナである。この聖なる鳥が不死鳥フェニックスで、フェニックスはイナンナの好物で「生命の樹」の原型と言われるナツメヤシの学名であり、イナンナのシンボルもしくは暗示でもある。

また、古代日本では不老不死が最重要視され、その妙薬とされたのが丹生（にゅう、硫化水銀）だが、この色は水銀朱と言われ、様々な神社仏閣で使用されているが、真相は不死鳥の燃える炎の色である。

アシュタルテはまた、天界と海の神、多産や生殖力の神、戦いの神でもあり、天神・海神・豊穰神・軍神の各性質を有し、いわば根源神的でもある。豊受大神は御饌津神で豊穰神であり、国常立とも言われる根源神でもあるから、原型はイナンナである。

新嘗祭では天皇が天神地祇に新穀を奉られるが、それは主として食を司る御饌津神に対してである。同様に、神宮に於いても、天照大神が新穀を聞し召すに際して、御饌津神に奉られる。その御饌津神とは、外宮の豊受大神に他ならない。故に、神宮に於ける各祭典は外宮先祭とされると言われるが、このように、豊受大神が根源神だからこそ、だろう。

なお、フェニキア人は商人でもあるがエンジニア集団でもあり、フェニキアの様々な技術や材料はソロモンの神殿建設に大いに貢献した、と言うよりも、フェニキア人がいなければ、ソロモン神殿は建設できなかった。そして、何よりも、フェニキアは最大の海洋民族でもあり、世界各地に大船団で航海していたのである。その一部が古代日本には来ていない、などと、誰が証明できようか？

②祭典内容

現在と大きく異なるのは、祭主ではなく斎王が奉仕すること、大御饌を供進するのは正殿階下ではなく御床下の心御柱であること、大物忌（おおものいみ、童女）がその供進にあたり、かつ、大神に近侍することである。物忌とは第二次性徴を迎える前の神職の子供で、特に童女が大物忌である。

15日に斎王が斎宮から離宮院（斎宮の離宮）に入り、禊祓を行ってから16日に外宮に参入。そして、太玉串行事の後に侍殿に候し、大宮司以下が奉仕する奉幣の諸行事が終わってから退出。一旦、離宮院に戻り、17日に内宮に参入し、外宮と同様に太玉串行事を終えて退出。

太玉串行事では、斎王は両宮とも外玉垣（とのたまがき）御門内に入って東殿（とうでん）の座に着き、左右に命婦が控え、西殿（さいでん）には女孺（によじゅ、下級女官）の座が設けられた。大宮司は藁木綿（かずらのゆう＊）を持って参入し、命婦を経て斎王に奉り、斎王は拍手して木綿を受け取り、藁に付ける。これは、神の姿を示現することを意味している。次いで、太玉串も同様に斎王に奉られ、斎王は内玉垣御門内に参入する。座に着いて、拝座にて両段再拝（**）し、命婦に太玉串を授ける。命婦はこれを大物忌に授け、大物忌がこれを瑞垣御門の西頭（にしのはとり）に立てる。斎王は東殿の本座に戻

り、そこに候する。

次いで、大宮司、禰宜、宇治内人（うじのうちんど）が太玉串をそれぞれ 2 枝、4 枝、8 枝ずつ捧持して中重の版に着き、大宮司の祝詞奏上後、太玉串を内玉垣御門の前に立てる。現在では大宮司以下、神職は各 1 枝なので、かなり多量である。また、内宮では天八重櫛と称する 64 本ずつの櫛を御門の東西に 1 列 8 枝ずつ立てる。その後、幣帛と御衣を正殿に納め、中重で八度拝後、退出。

* 木綿

「ゆう」と読む。楮（こうぞ）の木の皮を剥いで蒸した後に、水にさらして白色にした繊維で、いわゆる“もめん”ではない。これを櫛に括り付けたのが玉串で、より大きく立派な物が太玉串である。

** 両段再拝

起拝二度、坐して深揖（しんゆう）、次に起拝二度の神拝作法。拝は最も敬意を表す動作で、腰を 90 度折る。しばしば「一礼」と混同されるが、神事に於いて宮司一拝に合わせて、と言われたら、90 度腰を折る。祝詞や祓言葉が奏上されている際には 60 度で、座礼（床に正座しての参列）では平伏、立礼（りゅうれい、胡床などの腰掛に座っての参列）では磬折（けいせつ）と言う。45 度が深揖で、お祓いを受けるときの姿勢。15 度が小揖で、最も簡単な敬礼。

③ 物忌

物忌の子供たちの総称が子良（こら）。内宮には大物忌、宮守（みやもり）、地祭（とこまつり）、酒作（さかとく）、清酒作（みきつくり）、滝祭（たきまつり）、御塩焼（みさき）、土師器作（はじものつくり）、山向（やまげ）の 9 物忌が、外宮には大物忌、御炊（みかしき）、御塩焼、菅裁（すがたち）、根倉（ねぐら）、高宮（たかのみや）の 6 物忌が置かれた。大物忌、宮守物忌、地祭物忌を三色物忌（みくさのものいみ）と言う。

内院に参入するのは内宮では禰宜、大内人（3 員）、大物忌、宮守、地祭、酒作、清酒、介添え役の物忌の父 5 名で、御床下に供進するのは、大物忌と宮守、地祭だけだった。

物忌は、大御饌の準備や奉奠、正殿御扉の開閉など、最も重要な役目を請け負う。そのため、厳重な斎戒・禁忌が要求され、肉親の死に際しては解任されるなど、穢が許されなかった。故に、神の授かりものとされる第二次性徴を迎える前の子供が最適とされた。しかし、理由はこれだけではない。

太古、邪馬台国（ヤマトの国）では卑弥呼が女王となって小国的に国が統一されたものの、卑弥呼亡き後の男王の時代には国が乱れ、13 歳のトヨが女王となってようやく統一国家としての体制が整った。物忌、特に大物忌はその祭祀形態を継承しているのである。

④ 斎王の役割

奉幣の儀の最中、斎王は侍殿に候したままである。これは、天照大神の御杖

代として、大神の霊が憑りつくのを待っていたという説以外に、高皇産神の霊という説もある。新嘗祭が天照大神の皇孫ニニギノミコトとしての天皇霊威の更新ならば、神嘗祭は天津神の霊徳をもって天照大神親らの神威を更新される御儀で、その天津神とは、ニニギノミコトに天下るよう「斎庭（ゆにわ）の稲穂の神勅（*）」を天照大神と共に出された高皇産神である。

* 斎庭の稲穂の神勅

天上界の田で育った稲を地上に植えて、天上界のような稔り豊かで安定した国にきなさい、という天照大神の神勅。高皇産神が最初に天下るよう命じたのは、ニニギノミコトの父アメノオシホミミノミコトである。

しかしながら、この国の根源神で宇宙の根源神ともされるのが豊受大神であり、豊穰神も豊受大神であることからすると、天津神の霊徳とは、豊受大神の霊徳と考えるのがより妥当である。

(3) 神嘗祭と新嘗祭の時間のずれ

神嘗祭では夕大御饗が午後 10 時、朝大御饗が翌午前 2 時だが、宮中の新嘗祭（及び大嘗祭）では、かつては夕の儀が午後 10 時、暁の儀が午前 4 時だった。夕の儀は同じ時間だが、暁（朝）の儀は神嘗祭の方が一足早い時間である。

新嘗祭はかつて冬至の日没から忌籠って太陽神の霊が憑りつくのを待ち、陽がまったく果てた午後 10 時から深夜にかけて太陽神の霊威が籠る稲魂を頂いて霊性を養い、更に忌籠った上で、暁の頃に再び稲魂を頂いて霊性を完成し、太陽の復活と共に、若々しい日の皇子として顕現する、というものである。

神嘗祭の朝御饗が新嘗祭よりも一刻早いのは、天皇が霊性を更新されるに先立ち、その霊威の根源である天照大神の神威が更新されなければならないからであろう。それは、崇神天皇の時代まで、宮中のみで天照大神が祀られていたことからすると、かつては神嘗祭と新嘗祭は一体の形で行われていたものと推察され、故に、天皇霊威の更新に先駆けて天照大神の霊威が更新されなければならないためである。

このように、毎年神嘗祭で神の霊威は更新されるが、更に 20 年に一度の大嘗祭が神宮式年遷宮で、これにより神の霊威はより更新され、御遷宮が継続されることに依り、“神の永遠の常若”となる。

3：古伝新嘗祭

新嘗祭に限らず、各種祭典は明治維新後に全国的な統一が成され、各神社の独自の祭典は特殊神事という扱いになってしまった。その中でも異彩を放っているのが、出雲国造（こくそう）家に伝わる古伝新嘗祭である。11 月 23 日の午前中は“通常の”新嘗祭が斎行されるが、夜に古伝新嘗祭が斎行される。

出雲国造家は天照大神の第 2 の御子、天穗日命（アメノホヒノミコト）の子

孫で、大国主神を祀るが、南北朝時代に千家（せんげ）と北島の2家に分かれ、各月でそれぞれが大社の神事に奉仕して明治に至った。

(1) かつての祭祀場

現在は出雲大社の拝殿で斎行されるが、かつては新嘗会（しんじょうえ）と呼ばれ、出雲国造の元々の本拠地である松江市南・大庭（おおば）の神魂（かもす）神社と国造別邸で斎行された。神魂神社は、国造が居住したころの邸内社あるいは総社が平安中期以降に神社として展開したとも言われ、出雲国風土記や延喜式神名帳には記されていない。

出雲大社の本殿天井には八雲と言いながら7つの雲しか描かれていない理由が、1つが神魂神社に飛んで行ったからとされ、神魂神社本殿天井にはそれを裏付けるが如く、9つの雲が描かれている。また、出雲大社では神座は西を向いているが、神魂神社では東を向いており、対を成している。これらは、出雲大社と神魂神社が表裏一体の関係にあることを示している。

神魂の“魂”は“す”と読むが、“す”は言霊的に根源のエネルギーとも言われ、まさしく“かもす”は“神の魂＝根源のエネルギー”と言える。それを裏付けるが如く、神魂神社の主祭神はイザナミで女神であり、男神のイザナギではないのは、根源のエネルギーはすべてを生み出すエネルギーだから女性的性質であり、故に、主祭神はイザナギではなくイザナミなのである。従って、神魂を記号で書くならば、○の中に“す”の略号である“ㄣ”となる。

また、“かもす”は“醸す”でもあり、これは米を麴で発酵させて酒を造ることを意味し、古代、微生物の働きを神の働きと見なした。故に、日本人にとって最も重要な米から造られる酒も重要な神饌なのである。



(2) 古儀

11 月中の卯の日の早朝、両国造は神魂神社に参拝し、熊野神社（現・熊野大社）に飛脚を遣わして火燧（きり）杵と火燧臼を差し出すよう依頼する。

熊野神社から別火代の宮大夫が火きり（檜の板の火燧杵、卯つ木の火燧臼）を3枚ずつ持参すると、試しに鑽火（きりび）し、うち1枚の火を「お火所（ひどころ、国造用の忌火殿）」に移し、付近の茶臼山（神名樋山、かんなびやま）の「真名井の水」を使って新穀を炊飯する。この御飯は、神事の後半で国造の新嘗用に供される。火燧を持参した熊野の社人に対して饗応がある。

鑽火が済むと、国造は神魂神社に参入し、出雲大社に於いて最も丁重な御供である諸御供（もろごくう）を献進する。国造は箸を取って奉奠し、終わると本殿を降りて、庁の舎（ちょうのや）に設けられた稜威之席（いつのむしろ）

の座に着く。国造は本殿の方角を向いて着座し、出雲大社から随行の上官と神魂神社の神職が左右に揃うと、まず神魂の別火（べっか）が御幣を手にし、国造に向かって祝詞を唱える。終わると、国造・上官・神職が御幣を手にして同時に祝詞を奏上し、最後に別火が国造に向かって祝詞を唱える。この方式は、国造の世襲儀式である火継（ひつぎ）神事の 2 日目に神魂の本殿内で行うものと同一のようである。

続いて、歯固め、一夜酒頂戴、百番の舞となる。方式はすべて火継神事と同様だが、場所は本殿内ではない。

歯固めとは、神名樋山の真名井の滝で採取された小石を国造が 3 回噛む行事で、長寿の祈念や国造の神聖性の更新ともされる。

一夜酒は、火継神事の際には本殿内で炊かれた御飯の一部で造られるのに対し、新嘗会のものは国造別邸のお火所で、寅の日の夕刻に前年から残しておいた熊野の火燵の 1 枚で鑽火・炊飯し、醸造する。

百番の舞は、国造が榊の小枝と手草（たぐさ）を左右の手に 1 枚ずつ持ち、拝舞を 100 回繰り返すもので、社人たちが琴板を打ちつつ神楽歌を謡う。国造の舞が終わると、上官・神職・別火も囃子無しで 3 番ずつ榊舞を行う。

新嘗会の前半をなす神魂神社での行事はこれで終了で、次に国造別邸に座が移される。

国造別邸では、御釜の行事から始まる。この釜は、天穗日命が天照大神の神勅に依り、高天原より大庭釜ケ谷へ乗って降臨されたと伝えられる神釜である。広間に釜を据え、その正面奥の細長い高間（たかま）に国造が着座する。釜の上には 6 升の玄米飯が入れられた新俵が置かれ、神々の依り代として大幣 3 本、小幣 20 本が立てられる。神魂の別火が釜と国造に向かって祝詞を奏上し、担い棒の前部に稲穂 3 把、後部に一夜酒が入った瓶子（へいし）を付けて荷（にな）う。そして、杖を突きつつ釜の周りを 3 回回り、回る毎に「荒田（あらた）無し」と唱える。この時の別火の姿は、京都の聖護院が所蔵する熊野曼荼羅に於ける紀州熊野の稲持王子神像や、東寺の稻荷縁起の稻荷神の姿に近く、穀霊を祭る古い儀式のあり方が伺える。

続いて別邸にて、もう一度、歯固め・一夜酒頂戴（北島のみ）・百番の舞が行われるが、上官・神職・別火の榊舞は無い。これらが終了すると、国造の御飯頂戴となる。この晩の行事の始めに炊いた新穀の白飯を土器に盛り、“裸の役人（お火所番、禊を済ませたままの清い姿）”が持参する。国造はこれを 3 口食べ、残りは膳ともども下殿（おりどの）に下げる。

次に、火燵板（火燵臼）への揮毫（きごう）となる。千家の場合は、2 枚の火燵板に「新嘗会御火切」と書き、1 枚は 1 年間、出雲大社のお火所で国造用の食物調理のために使用する。もう 1 枚は、翌年の新嘗会の一夜酒を醸すためのものとして、別邸のお火所に残す。また、国造が頂戴した白飯を焚くために使用した 1 枚には何も書かず、翌日、国造の食物の残りや使用した膳具等と共に、打ち砕いて背後の山に埋める。

北島の場合は、3 枚それぞれに天御火切、新嘗会御火切、御酒火切と書く。天

御火切は元日の天火祭用、新嘗会御火切はこの日の晩から 1 年間の国造の食物調理用、御酒火切は翌年の新嘗会のために残す。

最後は翌日の日の出頃、侍之神事である。これは、前夜から奉仕した上官・神職らとの饗宴で、膳には一升盛りの白飯にブリ 4 切れが添えられ、醴酒が 3 巡し、配膳や酌には神魂の被官たちがあたった。この朝の国造の膳は一汁八菜で、それまで食べることが禁忌とされていた、その年に収穫された瓜、茄子、大豆、小豆、ささげ豆、干瓢、黍、粟の類が供される。

神魂と別邸の両方で行われることは、元々別邸で行われていたものが、神魂が展開するに従って儀礼が二元化したと考えられており、また、出雲大社ではなく大庭の地なのは、大社が創建される前の本拠地で行う慣習だったと考えられている。

新嘗会は国造世襲儀式である火継神事と多くの類似点がある。神聖な火と水に依り、国造は潔斎と禁忌を遵守し、神聖性を獲得・維持できるのである。そして、火継神事を通じて、神々と祖先の霊威を継承し、神の御杖代としての資格を更新するのである。

(3) 現行

主に 出雲大社 由緒略記 に依る。

- ・時刻前に祭場（拝殿）舗設。
- ・午後、末社の釜社に神職出仕を従え参向し、祭祀を行う。
出仕、神釜をかつぎ、祭場所定の席の敷薦（しきこも）の上に定置する。
- ・午後 7 時、祭場より諸事整備せる旨を報ずる。
- ・次、宮司以下一同、斎館より祭場へ参進着座。（奏楽）
- ・次、宮司祭壇に上り立って一揖後、側に伺候す。
神職、祭壇中央に軾（ひざつき）を敷く。
権禰宜、宮司の座前に敷皮を敷く。
- ・次、宮司、御飯及び醴酒を捧げて四方を拝す。
是より先、権禰宜、御飯及び醴酒を載せた膳を捧持して敷皮の上に置く。
次に、醴酒を捧げて前の如くする。
- ・次、宮司、相嘗の式を行う。（御飯を先にして醴酒を後にす。）
- ・次、宮司、火燧臼に文字を読む。（表面に新嘗祭御燧臼、裏に年月日。）
- ・次、宮司、齒固式を行い、本座に復す。
（真名井からの小石 2 個を土器に盛り、箸を添えた膳を権禰宜、敷皮の上に置く。宮司、左の手に土器を持ち右の手に箸を持って之を噛む。）
権禰宜、御膳を徹し、続いて権禰宜、敷皮を徹す。
- ・次、百番の舞を納む。
是より先、祭壇中央に掛盤（かけばん）を置き、次に左に手草を、右に手草受の三宝を夫々掛盤の横に置き、而（しか）して軾を敷く。（手草は榊の小枝

に葉二三枚あるものを紙にて根を巻いたもの。)

宮司、祭壇の掛盤の前に進めば、権禰宜二人左右に侍し、左座の後取（しどり）、手草を進む。宮司、手草を執って舞い、終わって右座の後取に渡す。右座の後取、これを三宝に置く。これを 100 回繰り返す。初中終の各 3 番は立って舞い、その余は坐して舞う。此の時、1 回毎に微音にて古伝の唱語をなす。この間、出仕、琴板を打ち鳴らしつつ、神楽歌、前の 50 番には「ア、ア、ウン、ウン」、後の 50 番には「皇神を よき日にまつりし あすよりは あけの衣を毛衣にせん」と唱う。

宮司、百番の舞を納めて再拝拍手し復座する。二人の権禰宜、これに従う。

- ・次、宮司、祭壇に上り一揖、御釜の前に進み再拝拍手、終わって復座する。
 - ・次、権禰宜の神事を行う。
- 其の儀、権禰宜、御釜の前に進み一揖し、後取より稲束と瓶子とを竹の棒の両端に近くくくったもの及び青竹の杖を受け取り、御釜の前に一揖し、稲束と瓶子を肩に荷い、青竹を杖とし、「あらたぬし」と賀詞を唱えつつ御釜の周囲を巡ること三度、終わって御釜の前に一揖し、後取に渡し徹せしめ、権禰宜、復座する。
- ・次、宮司以下一同、祭場より庁舎（ちょうのや）へ退出。（奏楽）
- 庁舎櫓の間に於いて、直会式を行う。

以上、簡潔にまとめると次のようになり、祝詞行事は無い。これは、午前中の新嘗祭で奏上されるためと考えられる。

- ・宮司の祭壇一揖、御飯と醴酒を捧げての四方拝、相嘗、火燧臼への揮毫、齒固め、百番の舞、祭壇一揖、御釜拝礼、釜の神事。

明治以前の火継神事や新嘗会では、黙祷形式の神秘的な祈りが御飯や一夜酒頂戴の際になされていたが、それは四方拝や相嘗の儀式に踏襲されている。

また、古伝新嘗祭の時代となってからは、大社では祭典に先立ち、職員を熊野神社に遣わして火燧を取り寄せるようになった。1915 年には熊野神社で鑽火祭（さんかさい）が行われることとなり、亀大夫神事（*）も復活し、現在では 10 月 15 日に宮司が神職若干名を率いて熊野大社に参向し、新しい火燧を受けることになっている。

新嘗会、古伝新嘗祭に於ける相嘗の特色は、新穀の食物を神前用と国造用に取り分けなないことである。御飯と醴酒を盛る土器はそれぞれ 1 つずつだけで、国造はこれを 1 品ずつ両手で捧げ、微音で神々に対する唱えごとをして神に供える形を取り、自らも頂戴する。出雲国造は古来、熊野神社からの聖なる火燧以外の火で調理したものを食べてはならず、国造用の聖なる食物を、国造の家族であっても他の人が食べることは禁じられていた。そのため、国造用と同一の火で用意された新穀を供えることを避けたのであろう。

* 亀大夫神事

出雲大社から長さが1メートルもある長方形の餅を2枚持参し、この餅を受け取るのが、亀太夫という熊野の下級神官である。亀太夫は餅の出来栄を、色が悪い、去年より小さい、形が悪いなどと必ず口やかましく、言葉を荒らげて苦情を言いたてるのが通例となっており、出雲大社の社人はこれを一々謹んで受ける。

(4) 考察

①神魂神社

神魂神社については前述の通りである。“醸す”ことから、古儀では一夜酒頂戴が重要視され、現行でも四方を拝する際に、醴酒とその原料である御飯を捧げる。

②熊野大社

出雲国風土記に依ると、出雲に於ける大社は杵築（きつき）大社（現・出雲大社）と熊野大社であり、格は熊野が上とされている。そして、神魂神社が熊野大社の遥拝所的位置付けである。神魂神社は出雲国府に近い古代出雲の中心地であり、社伝では天穗日命の子孫が出雲国造家として25代まで奉仕した。

天穗日命は大国主神に媚びて、3年間復命しなかった神である。大国主神を元々この地に居た縄文の神と見なせば、“穂”は稲穂だから、“穂日”で豊受大神と天照大神を祀った海部氏系を暗示している。

祭神は伊邪那伎日真名子（イザナギノヒマナゴ、父神であるイザナギが可愛がった御子）、加夫呂伎熊野大神（カブログクマノノオオカミ、熊野の地の神聖なる神）、櫛御氣野命（クシミケヌノミコト、スサノオの別名）で、いずれもがスサノオのことである。また、“クシ”は“奇”、“ミケ”は“御饌”だから、大いなる御饌津神ということで、豊受大神と同義であり、スサノオの原型はイナナンナで、豊受大神の原型もイナナンナだから、いずれにしてもスサノオ＝豊受大神＝イナナンナである。

また、後ろの山は現在「天狗山」と言うが、元々は「熊野山」で、この本宮は熊野山頂上付近にあった。その天狗山も、本来は「天宮山」と言った可能性が高い、という社伝からすると、スサノオを祀る「天の宮」ならば、この国の本来の最高神はスサノオで、それはイナナンナが原型の豊受大神である。

出雲国造家が当初に祀っていたのは出雲杵築大社でも神魂神社でもなく、意宇（おう）川上流の熊野大社だった。798年に意宇から杵築に遷されたのが、現在の出雲大社である。熊野と言えば紀伊半島が思い浮かぶが、熊野はこうに出雲にもあり、その熊野の根源は実は籠神社で、極秘伝では熊野大神＝住吉同体（住吉の神と同じ）で、亦名がスサノオである。“熊”は動物の熊ではなく、“大いなる、貴い”という意味である。

また、地名の意宇は海部氏の海部氏祖神、彦日明命（ヒコホアカリノミコト）の9世孫・意富那比命（オオナビノミコト）に因み、卑弥呼時代の男王である。

この意宇周辺には意宇六社があり、かつての意宇郡（現在の松江市、安来市、八束郡、能義郡）に鎮座する神社の内の熊野大社、真名井神社、六所神社、八

重垣神社、神魂神社、揖屋（いや）神社の六社を指す。この六社を参拝することが六社参りと呼ばれている。ここに、籠神社縁の熊野大社、真名井神社があることは極めて暗示的である。

火継神事だが、“火”は“日”でもあり、“火”は夜を照らし、“日”は昼を照らすから、出雲の火継神事と皇室の日継神事は「合わせ鏡」になっており、出雲大社の注連縄は他の神社とは逆に巻かれ、これも「合わせ鏡」の関係である。

そして、天上の“日”（陽）が地上にあっては“火”（陰）となり、天上が天照大神（神話上は女神だから陰）ならば、地上は降臨したスサノオ（神話上は男神だから陽）で、天上（陽）－地上（陰）の相関だけではなく、天上に於いても地上に於いてもそれぞれ陰陽の相関が見られる。

③歯固め

神名樋山とは、神が降臨する山という意味である。その山にある真名井の滝で採取された小石を国造が3回噛んで、長寿の祈念や神聖性の更新ともされる。

真名井の根源は言うまでも無く、籠神社の奥宮、真名井神社である。この“眞”の字は、人が首を下向きにしている状態を象ったもので、“顛（てん：逆さま）”の原字である。つまり、この世の物質世界は、主体である宇宙創造のエネルギーが客体となった状態である。現在はこの真意が封じられている壺＝井戸のような状態だから“眞名井”である。

宇宙に物質が創成され、生命体が誕生したが、様々な物を区別するために「名」が必要となった。それは、単に識別のためだけの手段だった。しかし、人類型の生命体が誕生してから、「あなたとわたし」という単なる識別に、「あなたの物と私の物」という所有の概念が付随し、それがいつしか膨らんで、「あいつのアレが欲しい」という欲望が発生した。これがエゴである。エゴがエゴを呼び、その所有欲から憎しみが発生し、戦争が発生した。人類型の生命体の歴史は、その繰り返しである。

神道では、死んだ人は神になって家を守る、という考えがある。神とは創造のエネルギーで、それと一体化するということである。創造のエネルギーは一体化することにより知識と経験を自らのものとし、進化していく。こう言うと人格神のようだが、あくまでも感覚の無い意識体なので、すべての元の意識体という意味で、ここでは起源意識と呼ぶ。つまり、人類はすべて起源意識の一部であり、この宇宙は多くの人たちの意識の集合体であって、そこに「偉い」とか「劣っている」とかの区別は無い。これが、海部氏と同族の、四国の大山祇神社に「和多志」と書かれていることで暗示されている。「私」は漢字として所有欲を持った個人を意味するが、本来は起源意識の一部だから、「和多志」が正しいのである。

現在は進化どころか、争いを繰り返している退化状態である。その原因は、「名」に所有欲＝エゴが付随したことに尽きる。それを解き明かすことができるのが唯一、真名井であり、真名井は宇宙の根本原理と人類の生命体としての

意味を説いているので、地球の根源であり、宇宙の根源ともされているのである。

以上のことから、歯固めとは、“眞名井の石＝意思を噛みしめ”てこの世の真意＝神威を悟る、ということである。3回噛みしめるのは、真意の封印の鍵となるカバラ、「生命の樹」の3本柱の暗示に他ならない。つまり、“眞名井の意思は神”ということである。

なお、「名」についての詳細は、以下を参照されたい。

<http://iyasaka369.blog.fc2.com/blog-category-2.html>

また、眞名井神社を奥宮とする籠神社は名が外された伊雑宮と表裏一体となるが、それについては長くなるので、以下を参照のこと。

<http://iyasaka369.blog.fc2.com/blog-entry-17.html>

熊野大社



熊野大社の鎮火殿



神魂神社



眞名井の滝



<http://bell.jp/pancho/travel/izumo/manai%20jinja.htm>

④天稚彦（アメワカヒコ）

出雲の新嘗祭と深い関係にあるのが、天国玉神（アマツクニタマノカミ）の子、天稚彦である。

日本書紀に於いて、天穗日命は高天原から地上に遣わされたのに、大国主神に媚びて地上に居座ってしまった。そこで、高天原ではもう一人、地上に遣わすこととなった。天稚彦である。しかし、天稚彦は大国主神の娘である下照姫（シタテルヒメ）を娶り、葦原中国（地上、日本）を治めることを決意した。

長らく天稚彦が戻ってこないことを不審に思った高天原の神々は、無名雉（ななしきじ）を偵察のために遣わしたが、天稚彦が高天原から降臨する際に与えられた天鹿兎弓（あまのかごゆみ）と天羽羽矢（あまのははや）で射抜き、それが天稚彦を地上に送り出した高皇産霊尊（タカミムスビノミコト）の前に飛んで行ってしまったのである。高皇産霊尊は、矢が血に染まっているのは天稚彦が地祇神と戦っているからだろうか？と思い、矢を投げ返した。すると、矢は天稚彦の胸を貫き、天稚彦は亡くなってしまったのである。この時、天稚彦は新嘗祭を終えて寝ているところだった。

天穗日命の子孫が現・出雲大社宮司家とされているが、その後に降臨した天稚彦は出雲で新嘗祭を執り行っていたのである。これはすなわち、天稚彦が古代の天皇だったことを意味する。この後、出雲の国譲りが行われるのだが、それは取りも直さず、天皇家の血統交代を意味する！

また、天稚彦が授けられた天鹿兎弓は、海部氏の祖である天香語山命（アメノカゴヤマノミコト）を連想させ、天羽羽矢は古事記では天之加久矢（あめのかくや）と言われ、これも同様である。

そして、天稚彦の父は天国玉神で、系譜は無いものの、御名からして明らかに天神である。

この話の続きは以下である。天稚彦の死を嘆く下照姫の泣き声が天まで届くと、天国玉神は降臨して葬儀のための喪屋を建てて殯（もがり、葬儀）をした。下照姫の兄であるアジスキタカヒコネも弔いに訪れたが、天稚彦に非常に似ていたので、生きてると勘違いして天稚彦の父と妻が抱きつくと、アジスキタカヒコネは、死人と間違えるなど穢らわしいと怒り、剣を抜いて喪屋を切り倒し、蹴り飛ばしてしまった。その喪屋が飛ばされた先は、美濃の藍見の喪山だという。

美濃は尾張と関わりが深く、尾張氏は海部氏の兄弟分家である。また、アジスキタカヒコネは葛城の高鴨神社に祀られ、葛城氏は尾張氏と共に手を携えて、邪馬台国の祭祀を行っていた。葛城氏は大王家・海部氏と婚姻関係を結んだ徐福の系統で、後に蘇我氏となった。（詳細は、以下の＜日本の真相 5＞参照。）

<http://iyasaka369.blog.fc2.com/blog-category-3.html>

剣も尾張氏と深い関係があり、高鴨神社では迦毛大神（カモノオオカミ）と

も言われ、海部氏は本来の賀茂族＝カモ族＝神族で天神系であり、大神とは、とても重要な神のことである。そして、アジスキタカヒコネは摂津国の阿遅速雄（あじはやお）神社でも祀られているが、この神社の例祭日（10月22日）には熱田神宮の宮司が参列し、熱田神宮の例祭日（6月5日）には阿遅速雄神社の宮司と氏子総代が参列し、尾張氏とアジスキタカヒコネは極めて深い関係にある。

以上のことから、地上に居た大国主神は元々ヤマトの国土に居た縄文系の大王の、天稚彦はそこに渡来して新たな大王家となった天神族の海部氏の暗示で、天稚彦にそっくりなアジスキタカヒコネは、海部氏が権力を委譲した（天稚彦の死）後に、秦氏（高皇産霊尊）の策略によって表向きの政権を動かすことになった蘇我氏の暗示と考えると、辻褄が合う。

「そが」の漢字は当て字で、出雲大社本殿裏にある「そが社」は「素鷲社」と書いたりするが、わざわざ「そが氏」に「蘇我」の字を充てたのは、“我、蘇る”という意味を込め、天稚彦の蘇りとも言えるアジスキタカヒコネ＝葛城氏を暗示しているのである。蘇我氏が、祖は葛城氏、と主張していたことは、こういうことである。

死んだ人にそっくりなのは“復活”を暗示し、この国を古代から貫いてきた思想は“不老不死”で、その原型は、縄文と海部氏の最高神である不死鳥フェニックスで豊穰の女神、イナナである。故に、新嘗祭に関わるこのような天稚彦とアジスキタカヒコネの話が創作され、古代の謎を解く鍵とされた。そして、天孫降臨神話は秦氏に依る創作だから、天孫（秦氏）降臨前に地上で新嘗祭を司っていた天皇とは、海部氏である。